

独居が半数弱の近未来 みとりは必須ですか？

上野千鶴子さんの提案

聞き手・真鍋弘樹 2024年10月24日

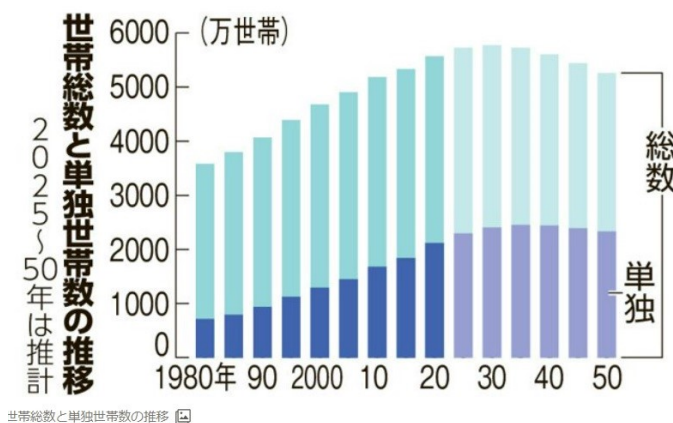
「みんな最後はひとりになる」社会学者の上野千鶴子さんは、ベストセラー「おひとりさまの老後」でそう書いた。現実はそのに追いつき、国立社会保障・人口問題研究所は、**単独世帯の割合が2050年には44・3%**になると推計する。上野さん、独居世帯が半数近くになる近未来を、私たちはどう迎えばいいのですか。 2024/10/24 **Asahi**

単独世帯、私が増やしたわけではない

——ベストセラーの「おひとりさまの老後」を書いた17年前と比べて何が変わりましたか。

「第一の大きな変化は**単独世帯**が圧倒的に増えたことです。いや応なしに進んだ人口学的趨勢（すうせい）ですから、私が増やしたわけではありません（笑）」

「第二に、**おひとりさまのイメージがネガティブからポジティブに転換**したことです。独居を選ぶ高齢者が増えたのは世界的に共通した流れで、**個人主義化は食い止められません。それに対応する社会制度が設計されればいい**のです」



世帯総数と単独世帯数の推移

——現状の問題点はなんですか？

「高齡おひとりさまの女性は貧困率が高く、男性は社会的に孤立する傾向の強いことがデータで明らかになっています。この貧困と孤立さえ解決されれば、単独世帯の増加そのものが悪いわけではありません」

女性の貧困は**人災**だと言っていい

——なぜ、女性は貧困に陥りやすいのですか。

「貧困の理由は**低年金**です。低年金の理由は、現役時代に低所得だったからです。日本社会では、女性の多くが働いてこなかったか、働いても低収入の仕事にしかつけない」

「雇用の規制緩和によって正規と非正規を分け、**労働市場を二重化**したことが原因です。働く女性の過半数が非正規なのは、夫に扶養されていれば女性の収入は家計補助程度でいだろうという理由からです。そこに家計支持者であるシングル女性やシングルマザーが参入していきました。女性の貧困は、人災だと言っていいものです」

——では**独居男性の孤立**は、なぜ起きるのでしょうか。

「3世代同居率が高い時代には、**高齡男性たちは家族の中で死ねました**。この二十数年の間に男性の孤立度が高まった大きな理由は、**離別と非婚の増加**です。女性は離別すると子を引き取り、シングルマザー世帯になることが多い。経済的な困難を背負いますが、親子関係は維持できます。実家との関係も強いですが、男性にはそれがありません」

「非婚の場合、女性の多くは経済的に困窮していてもシングルを継続しようとする。ところが**男性シングルはいつまでも『出会い』を期待し続ける**というデータがあります。**女に頼らなきゃ男は生きていけない**、ということでしょうか」

男性たちの社会性ってなんなのか

——さらに**男性は人間関係をつくるのが下手**ですよね。

「企業など男性ばかりの同質的な組織、**ホモソーシャルコミュニティは覇権ゲームの世界**ですから、心を許す友人関係はできにくい。**どちらが上か**ということで**値踏み**し合う

関係ですからね。男らしさ、女らしさを社会化されてきた結果、そうなっているのでしょう。反対に女性たちは相手の気持ちをくむコミュニケーション力を求められてきました。何十年も社会人をやってきた男性たちの社会性って何なのでしょうね」

——上野さんが回答者をしている朝日新聞の「悩みのつぼ」コーナーのようになってきましたが。

「友達はいます、と答える男性もいるけれど、じゃあ、その友達は、一人暮らしをしていてコロナで発熱して寝ていたら助けにきてくれますか？ 女の人ならたいてい助けにきてくれます。困った時に相互に助け合えるような人間関係じゃないんですよね。男性がつくるのは、弱さを見せない人間関係です」

——男として人生を送っていると、そういう特性は生得的なものなんじゃないかと思ってしまう。

「男らしさはDNA やホルモンでは決まりません。男性ホルモンが攻撃性を高めるといふけれど、人間はホルモンの奴隷でしょうか。幼い頃から、『男らしさ』を学習してきたのでしょうか」

家族形成コストが高すぎるゆえの未婚化

——それにしても、なぜ非婚の傾向が進んでいるのでしょうか。

「家族形成コストが非常に高くなっているからです。30代男性の婚姻率はきれいに年収と相関しています。コストは経済面だけではなく、女性の場合は時間と家事労働が重くのしかかります」

「いま30代の男性の3人に1人、女性の5人に1人がほぼ生涯未婚になるであろうと予測されています。家族形成コストが高すぎるので事前に回避する行動が『未婚化』であると分析する社会学者もいます。だから、このコストをもっと社会が共有して減らしてあげれば、結婚回避行動は減るだろうと予測がつきます」

世帯総数に占める類型ごとの割合

——親子の同居が減った理由はなんですか？

「子どもが老親と同居しないことは親不孝だと思われてきました。同居しないと子どもは責められ、同居を断る親は自分勝手だと世間から言われた。しかし、世帯分離する方が親とどちらにとっても楽だということが経験的にわかってきたからです。ただし、貧困と孤立がなければ、ですが」

——一人暮らしは個人的にも社会的にもコストが高くなりませんか。

「介護保険ができる前の親子同居で、誰がコストを払っていたのか。それは『嫁介護』という名の妻のタダ働きでした。それで家族は追い詰められ、介護殺人も起きた。同居は社会的なコストが安い、などというのは女性の不払い労働を無視した意見です」

——高齢単独世帯の増加にどう対処すればいいと考えますか？

「貧困と孤立に対処するには、定年制を廃止して高齢者も働けるようにすればよいでしょう。若者が減り、今では女性の労働力化はほとんど限界まできている。残っているのは高齢者ですから、働ける人はどんどん働けば、人ともつながります。定年制はエイジズム、年齢差別ですから」

「フレイル（虚弱）などで働けない高齢者もいますから、介護需要による福祉立国という選択肢もあります。医療と介護の需要で福祉まちおこしをしている地域もある。高齢者は、金融資産をため込んでいますから、それを活用してもらいましょう。介護保険には保険財源と同じだけの税の給付もついてきます」

孤独死と呼ぶのはもうやめよう

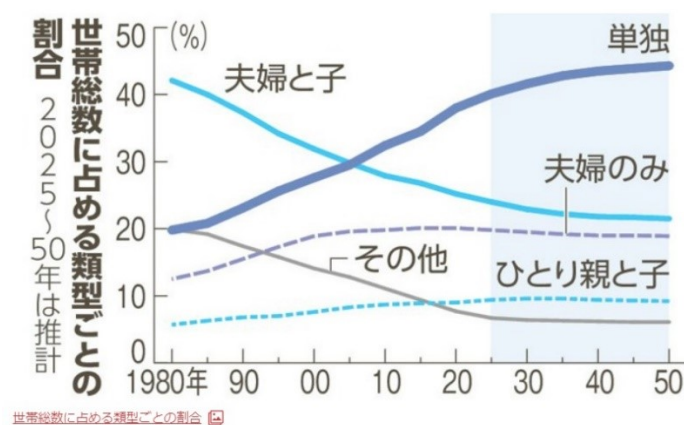
——**独居は孤独死**になりやすいという問題もあります。

「『**在宅ひとり死**』と**孤独死**は違います。多くの高齢者は**在宅で最期**を迎えることを望んでいますが、**介護保険につながれば、ケアマネジャーが付いてデイサービスやホームヘルプを利用できますので、孤立しないですみます**」

「ただ、介護保険の要介護認定率は全国平均でいま、2割弱なんです。介護保険につながる前の**グレーゾーンの人たちが、制度の谷間に落ちかねない**。一人暮らしの女性たちは、自分たちで相互扶助のネットワークを作っていることが多いです。ポジティブな生き方をしているおひとりさまは、**社会関係資本が豊か**なんです。モノを所有しなくても貸し借りしたり、お互い様で助け合ったり。**金持ちより人持ちで共助のシステムを作**っているのですが、**男性たちにはそういうネットワークがない**ようですね」

——孤独死になる前に、相互扶助で支えあうと。

「ええ、結果として**女性の孤独死の割合は男性に比べて低い**です。ただ、最近では、**臨終に立ち会い人のない死を孤独死と呼ぶのはもうやめようという提案**も出ています。ちなみに孤独死と呼ばれるのは、死亡してから一定時間以上経って発見された場合ですが、**3日以内に発見してもらえば十分ではないでしょうか**。なぜかという、要介護認定を受けて要介護1になると、最低限、週に2日のホームヘルプやデイサービスが入り、送迎サービスを受けられますから、亡くなっても3日以内に発見してもらえます。それでいいじゃないですか」



「子どもが親の臨終に立ち会いたいという思いこみを、私は『**看取（みと）り立ち会いコンプレックス**』と呼んでいます。死にゆく人が望んでいるとは限らないでしょうし、死に目に遭えなくてもいいのではないかと思います。**本人も家族も覚悟を決め**たらいいんです。後で悔やむくらいなら、もっと早く別れと感謝を伝えておけばいいでしょう」

——**高齢の独居は、不幸**なのでしょうか。

「間違っ**てはいけないのは、独居と孤立は違う**ということです。介護保険が施行されてからの24年間の蓄積のおかげで、**かつては不可能だった在宅ひとり死が可能**になりました。**この現場の進化は、世界に誇る日本の財産**だと思います。経験値が上がり、スキルがアップし、人材が育ちました」

上手に迷惑をかけるスキルを学んで

—自助について、どう考えればいいですか？

「自助といえば、**金で買うサービス**です。**金がないのを補ってくれるのは人間関係ですが、お金では人間関係を買えません。どうやって他人に助けを求めるか、そのためには自分の弱みを人に見せなければなりません。友達がいない親は、友達の作り方を子どもに教えられる**でしょう。『人に迷惑をかけない大人になれ』という教育方針は**完全に間違っています**。『人に上手に迷惑をかけるスキルを学べ』と育てた方が、はるかにその子の生存確率を高めます」

—人に頼るすべを学ぶべきである、と。

「そうです。人はずっと強者のままではいられない。勝ち抜くための教育ではなくて、弱者になった時にどうやって助け合えるかをちゃんと子どもに**学ばせない**といけません」

—家族の助け合いについて、どう思いますか？

「これまで、家族は『自助』の範囲とされてきました。しかし、『先生、家族って共助ですよ』と教え子の東大生が言いました。これが彼らの実感です。これまで家族は一体と考えられてきましたが、**今では家族もそれぞれの利害を持った『共助』**。だから、**家族関係を良好にしておかないと助け合えません**」

「**家族の中でも、かけていい迷惑とかけてはいけない迷惑**があります。なのに、**ずかずか**と親や子の人生に踏み込んで自分の思うようにしてかまわないと考えてきたのが、**これまでの日本の家族**でした。しかし、もう子どもたちは、そう考えてはいないようです。**家族って共助でしょ、ってお互いを尊重しあう態度を示している**のです」（聞き手・真鍋弘樹）

社会学者 上野千鶴子さん

うえの・ちづこ 1948年生まれ。東京大名誉教授。日本における女性学、ジェンダー研究のパイオニアの一人。「近代家族の成立と終焉（しゅうえん）」「おひとりさまの老後」「在宅ひとり死のススメ」など著書多数。

真鍋弘樹 オピニオン編集部 | フォーラム編集長

真鍋弘樹

(朝日新聞フォーラム編集長=社会、国際)

2024年10月24日9時34分投稿

【視点】

単独世帯の増加が避けられないとしたら、それに対応できるように社会制度や個人の生き方を変えるしかない。個人主義を中心に据えた上野千鶴子さんの真骨頂というインタビューでした。なかでも、「臨終に立ち会い人のない死を孤独死と呼ぶのはもうやめよう。3日以内に発見してもらえば十分ではないか」という合理主義にはうなりました。団塊世代の多くが75歳を超え、「多死社会」と言われる状況に近づいています。それを考えると、上野さんの提案が現実味を帯びてくる。臨終のときに看取り、立ち会いがなくても不幸ではない、という価値観の転換さえできれば。

一方、高齢独居の「女性の貧困」「男性の孤立」が大きな問題だというのはまったくその通りで、これは日本社会が抱える巨大な難題のひとつだと思います。団塊ジュニアという人口の大きな塊が含まれるロスジェネ、就職氷河期世代は50代を迎えつつあります。そして、過去のように家族にすべてを背負わせることはもうできない。日本に住む限り、誰もが無関係ではられない問題です。